拉致被害者

松本京子（まつもときょうこ）さん

１９７７(昭和５２)年１０月２１日
米子市内の自宅近くで拉致
（当時２９歳、米子市出身）

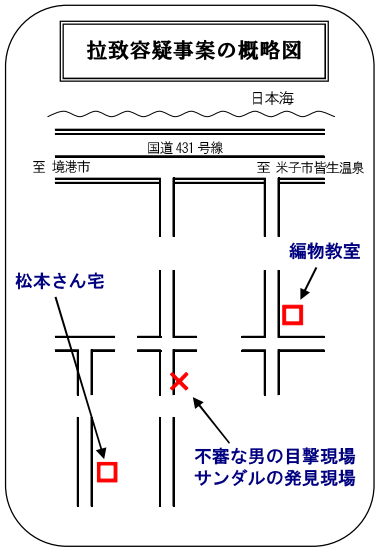
失踪時の状況　－特定失踪者問題調査会の調査より－

- １９７７(昭和５２)年１０月２１日午後８時頃、自宅近くの編み物教室に行くと言って自宅を出たまま行方不明。失踪時は、紺色のスカートとチョッキ・白色のブラウス・サンダル履きという普段着で、現金は所持していなかった。
- この日の夜、京子さんの自宅から約２００メートル離れた家の人が、裏庭で京子さんと見知らぬ男が会話をしているのを目撃している。
- 男性は２人で、１人が京子さんと会話をし、もう一人は見張りをしているようだった。
- このとき、目撃者が「何をしている？」と男に声をかけると、１人が殴りかかり、額に縫うほどの怪我を負わせ、海岸の方向へ逃げている。
- 通報を受けた米子警察署が男２人を傷害の疑いで追ったが、捕捉できていない。

失踪に係る不審な点

- 海の方に向かって、何人かの足跡が残されていた。
- 京子さんのサンダルが片方だけ残されていた。
- 当時、警察が不審な電波の交信を傍受していた。

＜現場に残された京子さんのサンダル＞



京子、今どこにいる －松本京子さんの兄 孟（はじめ）さん－

京子、今どこにいる？
清津（チョンジン）か？ 平壌（ピョンヤン）か？ 生活は大丈夫か？ 早く帰らないけんがなぁ。

あの日、「京子が帰らない。」と婆さんから連絡があった。

警察に捜索願を出して捜してもらったが、何も分からなかった。ただ、編み物教室に通う道ではないような、あのビニールハウスの所にサンダルが片方だけ落ちていた。そこでいったい何が起こった？

全く何も分からない状況の中で、婆さんは京子のことを捜し回っていた。どこを捜しても何も見つからないので、藁（わら）をもつかむ思いで「拝み手さん」に看てもらったら、境港だったか美保関だったか、神社に「足止めの祈願をしなさい」と言われ、残されていたサンダルを持って願掛けしたんだよ。でも、どこを捜しても何の手がかりも出てこなかった。

せめて京子の居場所を知りたかった。国内にいるのか、それとも外国へ行ってしまったのか。

それから何年経っただろうか。せめて電話の一本、手紙の一通が欲しいと思いながら年月が過ぎていった。

２００６年１１月、京子が政府に北朝鮮による拉致被害者として認定されて以来、県も市も大騒ぎで帰国後の準備を進めてくれています。中学校の同級生も、近所の人たちも応援してくれているよ。京子の会社の人たちもみんなが声をあげて応援してくれています。

約３０年間、何もできなかったけど、日本の国を信じてください。国も一生懸命対策を考えています。必ず京子を助け出します。早く帰ってくるよう皆で頑張っています。

それまでは辛抱して、絶対に希望を捨てないでください。（「しおかぜ」から）

ラジオ短波放送「しおかぜ」

毎日、午前５時 30 分からの 30 分間（6045 キロヘルツ）と午後 10 時からの 30 分間（9485 キロヘルツ）に、北朝鮮全域に向けて放送されるラジオ番組。拉致被害者・拉致の疑いのある失踪者の氏名等データの読み上げのほか、ご家族からの手紙の代読、ご家族の直接のメッセージなどが放送されている。

京子、元気で暮らしていますか

－松本京子さんの兄　孟(はじめ)さんより－

京子、兄貴だけど、元気で暮らしていますか？今年の日本はすごく暑かった。みんなこちらの家族は元気で暮らしております。

今年で 36 年、長い年月、北朝鮮で不自由な暮らしをさせて申しわけないなと思っております。

なんとか 1 日でも早く日本に帰れるよう、兄貴としても頑張って家族が力をあわせ、救出のためにいろんなところで講演をしたり、署名活動をしたりしておりますので、これからこのことが日本の皆さんに分かっていただける日もくると思いますので、元気でおってください。

H25.10.28「国民のつどい」において、一言訴え行う松本孟さん

今日は京子に普段兄貴たちが何をしているのかっていう、そんことを日本の皆さんに、全国の皆さんに知って頂く「国民大集会(注 1)」を行う日です。

米子のビックシップっていう大きな米子の駅前にできた建物の中で、大勢の人が集まって京子が 1 日も早く帰ってこれるように、世論を盛り上げて、そして京子が元気で帰ってこれる、そんな運動をする今日は 1 日です。

ほかには公民館活動といって、鳥取県の公民館を月に1、2度まわって、京子の救出を訴える、そんなこともしております。

これも皆さんがちゃんと聞いて、この拉致問題がどういうことなのかっていうことを、じかに聞いてもらって、そして理解をしていただいて、妹の京子の救出に役立ててもらう、そんなようなことをしております。

今年の夏は暑かったですけれども、家族、身体に気をつけて。

私たちもみなさんに、身体に気をつけて頑張ってください、というふうに言われますので、身体にだけは気をつけてこの運動をし、そして1日でも早く帰ってこれるように、そして、この拉致問題が風化しないように署名活動、そして講演に頑張っております。

そして今年は12月に入りまして、富山それから四国、松江と 12 月は3回講演があります。

大変は大変ですけれど、そうやって京子がなんとか国民の皆さんに知られ、そして1日も早く元気に日本に帰ってこれる、そんな日を夢見ながら、私ども家族が、そして親戚が頑張って、更に頑張って救出に全力をかたむけて、頑張ります。

それまでは大変つらいでしょうけど、頑張ってくじけずにおってください。

そして、今日のことはラジオ(注 2)で流れますので、是非聞いてやって、そして元気をだして、また再会ができるのを楽しみにしております。くじけずに頑張って北朝鮮で暮らしてください。

そして私ども家族が一生懸命救出運動に頑張りますので、それまでの辛抱ですから、

今しばらく辛抱してやってください。お願いします。兄貴からでした。

（北朝鮮向け短波ラジオ番組「ふるさとの風」平成 25 年 10 月 28 日収録）

※注 1：政府・鳥取県・関係自治体等の主催により開催する「拉致問題の早期解決を願う国民のつどい in 米子」（「国民のつどい」）。拉致被害者御家族等が一言訴えを行う。

※注 2：北朝鮮向けラジオ番組「ふるさとの風」（政府拉致問題対策本部）
政府が北朝鮮に囚われている人たちに向けて放送している短波ラジオ番組。
松本孟さんのメッセージは平成 26 年 3 月 3 日～放送開始

元人民軍大尉の目撃証言

― 金国石氏（脱北者・仮名）と兄・孟（はじめ）さん ―

２００３（平成１５）年１０月８日　韓国ソウル市内　世宗（セジョン）ホテルにて

松本孟氏（松本京子さんの兄）「妹に会ったのはいつ頃か？」

金国石氏（元人民軍大尉、脱北者、仮名）「正確な日付までは覚えていないが、京子さんと初めて話したのは１９９６（平成８）年５月。場所は清津（チョンジン）連絡所だった。」

＜手前背中：金国石氏＞

松本「話をした時間は？」

金　「１５分位。」

松本「妹を見た感じは？」

金　「性格は明るい。目立つ様な感じではない。４０歳代に見えた。赤い色のアクセサリーやカバンを身に付けていたのでよく覚えている。清津連絡所には、他に日本人の男性もいたので結婚していると思われる。彼らは連絡所の外には出られない。清津連絡所は、普通の一般人も入れない労働党の施設である。」

松本「妹の仕事は？」

金　「清津連絡所は日本への戦略地点。
約１００人の戦闘員がいて、京子さんは日本語を教える仕事をしていた。」

松本「誰でもできる仕事か？」

金　「日本人に限られている。」

松本「最後に会ったのは？」

金　「１９９７（平成９）年３月だったと思う。手編みの手袋と上着を身に付けていた。」

松本「編み物の出来はどうだったか？」

金　「見た感じでは、デパートで買ったものというより、自分で編んだようなものだった。」

松本「妹は編み物教室に通っていた。編み物の色はどんなものが多かったか？」

金　「ピンクやオレンジが多かった。
（京子さんのアルバムを指差して）こんな色のもの。靴下は白で、上部に赤いアクセントがあるものだった。ピンクとオレンジが混ざった色だった。」

松本「もう一度そこへ行くことはあるか？」

金　「どういう意味か？行くことは可能だが、命懸けである。自分ではなく、第三者を通して手紙は可能かもしれない。だが、今、そこに居るかどうか分からない。京子さんは元気な感じだった。清津連絡所には慣れている様子だった。明るい感じだった。」

松本「妹はこの写真より痩せていたか？それとも太っていたか？」

金　「この写真よりは痩せている。鼻のあたりのホクロはよく覚えていないが、この写真と似ている。（京子さんのアルバムを指差して）はっきりと京子さんと言える。京子さんとお兄さんはそっくり。」

松本「私を見て間違いないと思うのか？」

金　「京子さんということは確実である。清津連絡所は、誰でも出入りできる所ではないので、間違いはない。」

松本「妹を見て、気が強いと感じたか？」

金　「気が強いというよりも明るい人だった。京子さんは偉い人と一緒だったので、その人の肩を叩く仕草は確かに意志が強く気が強いと思う。」

松本「そのとおりですねぇ。」

金　「年齢よりも若く見えた。まだ会えると思う。」

3